

## 第5回「大阪がめざすSDGs先進都市の姿」 検討ワーキンググループ 議事録（メモ）

日 時：令和元年12月4日（水）14時から16時

場 所：大阪府庁新別館北館1階 災害対策本部会議室

有識者：（敬称略・所属五十音順）

- ・草郷 孝好 関西大学 社会学部 教授
- ・西野 恭子 国際協力機構（JICA）関西センター 所長
- ・村上 芽 株式会社日本総合研究所 シニアマネージャー
- ・川久保 俊 法政大学 デザイン工学部 准教授
- ・中島 毅 吉本興業ホールディングス株式会社 SDGs 本部 副本部長

出 席：合計19名

次 第：1. 意見交換

議題① 重点ゴールについて

議題② 優先課題について

議題③ 「未来像」のイメージについて

2. その他

### ■ 議事録

#### 【議題① 重点ゴールについて】

（西野所長）

到達点の分析後、府の施策との整合性を確認し、さらにアンケートで広く府民の皆さんの声を聞いているなど、非常に丁寧なプロセスを経て、今のたたき台に至っており、説明を聞いていて非常に説得力がある。

重点ゴール案に関しては、17個のゴールのどれもが重要なゴールであるという前提のもとで、プロセスを経ていることは理解できるが、少し分かりにくかったのがゴール8の扱い。ゴール8は、府民等のアンケートの中でも上位の結果となっているが、最終案に含まれていない点について、その整理や考え方についてお聞きしたい。

また、ゴール5のジェンダーについて。ゴール5は、日本として、他の取組みが進んだ国々と比べると評価が低くなっている状況。現在、国全体としてもジェンダーには力を入れて取り組んでいる中、アンケートでは優先事項としての結果は示されていなかったが、取り組む必要があると思う。ジェンダーはどのゴールにも横断的に関わってくるという意味で「あらゆるゴールに取り組むときに考慮する」といった形で取り込むこともできるのではないか。

（事務局）

重点ゴールのイメージについては、「中間整理案」の取りまとめを踏まえ、課題の多いゴールのうち、府民等のアンケートでも関心が高いゴールについて全て取り組むべき、また、強みを活かせるゴールに関しては、最も関心が高く、他のゴールを引っ張るゴールに取り組むという考え方で整理した。

このうち、強みを活かすゴールについては、ゴール8、9、11全てを重点としたいのが本心ではあるが、府民の皆様の関心が最も高く、経済、雇用、産業なども包摂したまちづくりを進めるといった観点も含め、たたき台として、ゴール11を取り上げたところ。

(川久保先生)

今回、重点ゴールが2つ、縦断的に取り組むゴールが3つ、合わせて5つのゴールの整理となっているが、残り12個のゴールをどうするのかということは必ず問われることになる。例えば、一見すると環境系のゴールが入っていないのではないかとといった捉え方もある。府民の方々からも、「私に取り組んでいるゴールがない」という指摘がなされる可能性がある。

その際、今説明があったように、「絞り込まれた5つのゴール以外の視点については、絞り込んだ5つのゴールのうちの〇番に含めてある」といったような視点が必要。例えば、「環境関連のゴールはゴール12やゴール11に関連させてまとめて取り組むつもりである」といったように、17ゴールは全て統合的に取り組むが、いくつかは絞り込まなければ、結局総花的となりむしろ注力する部分がわかりにくくなるのでこのように整理したといったような形で、5つのゴールに集約・整理した一覧表があるとわかりやすく、また、「だれ一人取り残さない」という府の考え方も理解いただけると思う。

また、今回の取りまとめで一つだけ気になる点があるとすれば、今後顕在化してくるような問題の見落としが無いかなど、将来的視点が入っているのかということ。現在の延長線上、もしくは現在顕在化している問題を出発点にすることは当然重要ではあるが、今は気づかないところにも将来大きな課題になり得る点がないか可能な範囲で推測しておく必要がある。

(事務局)

ご指摘の将来の問題や課題の視点については、先ほどの説明のとおり現状からの視点で整理を行ってきた面があるため、今後検討したいと思います。

(草郷先生)

重点ゴールのイメージは、よく整理されている。そのうえで、大きく2つコメントさせていただきたい。

1つ目は、ジェンダーと環境の視点。国際協力の世界では、ジェンダーと環境の問題は複数のゴールに関わる横断的なイシューとして取り扱われている。横断的でありながら、MDGsの時代から個別のゴール・課題として取り扱われているのは、それだけ非常に重要で深刻な問題であるという認識が強かったことを背景としている。ゴール5は、比較的中長期の取組みの結果としてしか、その効果が出てこないもの。しかしながら、そこに至るまでに教育とか貧困問題にしっかりと取り組まないとゴール5の上昇は見込めない。そのように考えると、ゴール5は、必然的にゴール1、4、あるいは3に関係してくる。そのような観点

がわかるように、ジェンダーの位置づけを検討していただきたい。

環境についても同じことが言える。ゴール 13 の気候変動は、現在、気候変動サミットが行われているように国際的な共通の課題。特に、大阪では、先日の G20 大阪サミットにおいて合意された「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」についても、ゴール 11、12 などに強く結びついてくる。もちろん、教育問題を含め市民に対する意識付けができるかどうかなど、全てのゴールが環境に関わってくるので、環境の観点についてもうまく構造化してほしい。

2つ目は、34 ページのイメージ図について。イメージ図は極めてよくできていると思う。なぜなら、SDGs の最大の弱点は統括目標が設定されていないことであり、その結果 17 ゴールに分かれてしまっている。結果的に、17 の目標が達成されれば、世界で生活する人々の well-being がどのように変わるかということがわかる統括指標がない。また、地域の well-being という観点からも同様に指標がない。

言い換えると、そうした統括する目標・指標を地域で決定することができるということでもある。それらを踏まえたうえでの、私の本イメージ図の解釈としては、重点ゴール一つ目のゴール 3 は、大阪で暮らす人々、つまり市民目線での well-being についての整理、重点ゴール二つ目のゴール 11 は、大阪そのもの、つまり地域にとっての well-being について整理されたものと受け止めている。そういった意味で、非常にうまく組み合わせられた、総合的な well-being の図になっていると思う。

今後、この図をブラッシュアップする中で、個人・府民にとっての生活の改善、そしてそこで暮らしを立てている大阪そのものの改善、というものが見えるような形で整理すると良いと思う。そうすれば、先ほど指摘があった他の様々なゴールの結びつきについても見えてくるのではないかと思う。

(事務局)

ジェンダーと環境の問題、また先ほど川久保先生からご指摘のあった重点ゴール以外のゴールの整理も含め、17 のゴールをどのように構造化・ストーリーをつくっていくのか引き続き考えていきたい。

ゴール 3 が市民目線で、ゴール 11 が地域目線、というのは事務局側も気づけていなかった視点で非常に明確になった。

(村上シニアマネージャー)

平和と環境は、これが損なわれると他も全て悪影響を受けてしまうベースの部分。そこを認識しつつ、府として重点化するゴールを整理していくことが大切だと思う。

また、ジェンダーについて。資料 1 の若者の声のマテリアリティ分析で、中央値の少し上にゴール 5、その下にゴール 10 があることについて、若い世代でゴール 5 と 10 は少し関心が高いという点には、メッセージ性があると考えている。重点ゴールの 5 つのゴールに取り組む担い手が誰かを考えたときに、若者によるゴール 5 と 10 の受け止めは非常に重要ではないか。

加えて、資料 1、24 ページの国際比較の部分を見ると、上位 3 か国の評価が高くなっているのがゴール 5 とゴール 10。この図を改めてみると、上位の国はゴール 10 が高いというこ

とも再認識した。

（事務局）

たしかに、上位3か国では、ゴール10の評価が高い。ご指摘を踏まえて、ビジョンとしては総花的にならないことを念頭におきつつ、どういうふうに関組を進めるのか考えていきたい。

（中島副本部長）

資料はすごくよくできていると思う。また、先ほど来の先生方のご意見も非常に納得できるものが多い。私からは、一大阪府民の声としてお話をさせていただきたい。

24ページに世界3都市の取組事例が記載されているが、府民にとってもこれぐらいわかりやすい具体的なメッセージ・取組事例が一つでもあると良いと思う。

SDGsでよく言われるのが「知ること」、そして「自分事としてどう捉え実行していくか」ということだと思うが、SDGsは、目標年次まで時間がない。2030年もそうだが、例えば、2025年の万博のときに大阪がここまでできている、というメッセージを出さなければいけないと思う。

2025年にスタートするのではなく、2025年に大阪が先進都市としてここまでやっていると見せるためには、もっと早く動かないといけない。また、府民にも「これなら私もできるな」ということをメッセージとして残していくと、より具体的になるのではないかと。

（事務局）

例えば、重点ゴール3に関連し、現在「10歳若返り」という取組を実施しているが、そのようなイメージか。

（中島副本部長）

そういうことだと思う。10歳若返りが、何をもちて10歳若返りなのか、何をすれば10歳若返りなのか、そういうところまで落とし込むと府民は理解していただけると思う。

（草郷先生）

先ほどの2つ目のコメントに少し補足をさせていただく。大阪独自の包括的なものさしがあっても良いのではないかと提案。

今のお話を聞いていて考えがより深まったが、具体的でわかりやすい、例えば、笑顔指標、“SDGsスマイル”みたいなものができたなら、その指標がどうしたら上がるのかを考えるようになる。

今日の資料で示されているものは、とくに重要な、有意差のあるレベルの変数の関係を示したものであると思っており、それらを紐づけしたような仕組みで指標をわかりやすいイメージ図としてまとめられたらよいと考える。人目線でのものさしや大阪という地域全体のものさしが改善されることが、総合的に改善されていく指標を変化させるという仕組みである。そうすれば、“大阪SDG“がどのように変わっていくのかを、府民が見て納得できるように

なるだろう。そういうわかりやすい大阪独自の包括的ものさしが出てくると府民にも浸透もしやすく、イメージもわかりやすくなると思う。

(川久保先生)

中島さんや草郷先生のご指摘のとおりだと思う。今まで見てきた指標は全国共通で見る指標となっているが、府独自の指標を考えるべき時期に来ているのではないかと思う。

いくつか指標を検討していく中で、その中で一番重要な KPI は何かを今一度考えていかなければならないと感じた。

資料の重点ゴールのイメージ図も、一見するだけではゴール 11 とゴール 1、4、12 とのつながりがわかりづらく、ストーリーをより具体化していくことが大切だと思う。

## 【議題② 優先課題について】

(川久保先生)

先ほど、ゴール 1 から 17 まで表をつくり、どのゴールが集約されているかをわかりやすく示してはどうかという話をさせていただいたが、資料の中で、実はそういった整理が既に部分的になされていると思う。

ターゲットからまとめるかどうかについて議論はあると思うが、例えば、ゴール 11 に関連する取組みとして、子どもの貧困対策や、ゴール 8、9 にも関連するような若者が何度でもチャレンジできるまちづくりと働き方改革、CO<sub>2</sub>排出に向けた取組みはゴール 13、廃プラスチックの問題はゴール 12 やゴール 14 のマイクロプラスチック問題の対策に関連するなど、こういった形で整理を行っていくと、実は全部のゴールが自然に集約されてくるのではないか。

(西野所長)

ゴール 11 の強みに関しては、様々な取組みが集約されており、非常に面白い整理だと思う。一方で、ゴール 3 に関して、府の施策として進めていることとの整合性のほかに、今顕在化していないが将来顕在化するかもしれないという革新的な視点が必要になると思う。今現在認識している課題と、そこには入っていないような新しいものも入ってくると良いと思った。

例えば、主観的幸福感が SDSN の指標となっているように、最近、幸福度ということが話題になっている。おそらく健康も含めて我々は幸福な状態をめざすということが根底にあると思う。幸福感や幸福度といったことが指標になりうれば、市民目線として面白いし、市民としてもどのように達成されていくのか知りたい指標になるのではないかと感じた。

(事務局)

よりチャレンジなところ、違う分野で捉えていくこと、幸福度をどう捉えていくのかも含めて検討したい。

(草郷先生)

先ほどの重点ゴールのイメージとつながる部分があり、指標をどう扱うのかというのは非常に悩ましい問題。SDGs をどう達成していくのかという観点に立って整理していくべきだと思う。

SDGs の理念は「誰一人取り残さない」、「社会変革」。それを踏まえて、大阪府でも野心的に、大胆な改革を進めるところまで議論が進んできたところ。では、どのようにしてゴール3や11 で実現しようかという議論が必要。例えば、「誰一人取り残さない」社会に必要なことは何か。それがおそらく優先度の高いレベル①の指標となる。また、それに紐づけられる指標は何か、あるいは、大阪の中で大胆な変革をしなければならないことは何なのか。そういった構造を整理していく必要がある。並べただけの指標を見ただけでは SDG の影響評価やインパクトを評価できない。指標はあくまでツール。大事なことは、何のためにツールである指標をつくるのかという、フレームワークの詰めが必要であって、指標ばかりを集めただけでは、なんとなく良くなったというレベルの議論で終わってしまいかねない。せっかくイメージ図まで詰めているので、どのように指標に落とし込んでいくのかというフレームワークをしっかり組み立てることが必要だと思う。ゴール3やゴール11 をレベル①の指標に位置づけ、それらを中心に整理していくと、必要な指標はゴールに関係なくつながっていくだろうというイメージを持っている。

(事務局)

ということが特に大阪で喫緊の課題となっているのか、もう一度整理し直したいと思う。

(川久保先生)

SDGs は、ゴール、ターゲット、それを補足するインディケーターという三層構造になっていて、インディケーターが一番後から出てくるもの。大阪府にとっての SDGs は何かを考え、それを具体化させるという意味でターゲットに落とし込み、最後にインディケーターを整理するものだと思う。そういう順番で考えないとおかしくなる。そういったことが、「未来像」のイメージの議論にもつながっていくと思う。

(村上シニアマネージャー)

優先課題の整理の仕方について、私は、案にあるようにゴールやターゲットからさかのぼって整理する方が良いと思う。また、ゴール3と11 だけでなく、他のゴールについてもターゲットから整理された方がいい。なぜなら、ゴール3と11 に加えてゴール1、4、12 との組み合わせ感が絶妙な感じ、大阪の独自性があると思う。そこを整理すると漏れたゴールの整理も含めてより簡単になると思う。

また、ターゲットの3.D のところで、資料では、開発途上国の文言にカッコを入れておられるが、これは、既に大阪府としてターゲットを読み替えているということになると思う。SDGs のターゲットで書かれていることを、大阪府の文脈でいうと具体的にはこういうことを言っているというような解釈が、具体的な取組みや事業との間にあれば、より分かりやすくなるという期待がある。

ターゲット側から整理する方がいい理由として、取組みから整理していくと、素直にターゲットに結び付かないものが必ず出てくると思われる。それがなぜ関連づかないかという理由は様々に考えられるが、一つは、メンタル面や介護にまつわる課題など SDGs がそこまでカバーできていない課題に対する施策が既にいろいろある。そういうものは、まさに万博後に提案していくようなタイプのグループであり、無理やり紐づけて方向性が薄まってしまいうよりも、SDGs 後の課題といったような形で位置付けておく方が、先を考えると面白いと思う。もちろん、それ以外で結びつかないものの中には、重要度が小さく他に含まれているという可能性もあり、そういった形で色分けされた方が良いと思う。

（事務局）

グローバルとローカルをどういうふうにつなげていくかを非常に悩んでいたが、ご提案のようにターゲットと施策の間にブリッジをかけるのが大阪らしさを出すという意味でもいいと思う。また、メンタル、介護などはターゲットには書いていないので、SDGs の先、“Beyond”のような打ち出しをすることも考えたい。

（中島副本部長）

草郷先生のご意見は、ビジネス面でも活用できる話。指標は都合のいいようなものばかり集めがちだが、本当に何をやりたいのかということのフレームワークを行うということは素晴らしいご意見だと思う。

（草郷先生）

12 ページの万博のスライドについて。「いのち輝く未来社会のデザイン」は、大阪が決めた万博テーマであるから、「いのち輝く」ということに紐づくような活動や行動に関する記述が必要だと思う。ただ、万博についてのスライドの最後に経済効果しか標記されていないことは、すごく残念でもったいないことだと思った。例えば「SDGs インパクト」を示すことがあってもよい。万博をやって様々な生産活動が増え、経済の波及効果があるという経済効果を想定することは、これまでもやってきたこと。本当に SDGs のめざす変革を進めるには、効果を評価するような仕組みの中にも新しい見方を加えることだと思う。そのことを考えると、先ほどお話したような経済効果とは違う視点の SDGs インパクトが必要だと思う。それをうまく事業ごとに紐づけられると、今後、新しい公共サービスを展開するときには、SDGs インパクトも示していけるのではないかと思った。そうすれば SDGs インパクトを見て、事業が重要かどうかという議論もできる。そういう意味でも指標をしっかりと整理されることが大事だと思うし、ターゲットをどう設定するかも大切になる。

（事務局）

万博をすることによってどのように社会が良くなるのかという部分を SDGs が担っていると思う。そういう点も考えながら取り組んでいきたい。

### 【議題③「未来像」のイメージについて】

(西野所長)

万博後の大阪の将来像の3つの柱について、率直に申し上げると、「世界をともにつくる」よりも、「いのち輝く幸せな暮らし」のほうが、これまでSDGsのワーキンググループで議論した未来像として重なってくるのではないかと思った。「世界をともにつくる」に関しては、説明を伺う限りでは、より国際的な貢献を念頭においたコンセプトのように聞こえた。メインは府民であるはずであり、将来を見据えたときに、海外との関係性、あるいは喫緊の課題となっている外国人労働者含む多文化共生など、そういったものがあるにせよ、少なくともこれまでの課題のお話では大阪府民が中心であったわけで、その点に少しギャップを感じた。

また、我々JICAは国際協力をしている組織であるが、これまでは日本から途上国へ支援するとの意識が強かったが、もはやそういう時代ではなくなってきていて、国際協力は双方向であると認識しているところ。そういう意味では、国内国外と分けて考えること自体を変えていく段階にきていると感じている。

(川久保先生)

未来像の具体的取組みで、「大阪らしさ」を感じない。“SDGs Advanced Osaka”と書いているが、取組みの内容は、東京などの他の都市に置き換えてもほぼほぼ同じことが言えるのではないか。唯一、「三方よし」の取組みなどの具体的なところは違うが、それ以外は大阪色が弱い。東京から来ている私からすると、もう少し大阪らしさが出ないかと気になっている。参考3の2ページの歴史から導かれる大阪の特色には納得感がある。これまで大阪はこういう歴史、特徴があって栄えてきたことを踏まえ、そこを反映されると大阪らしさが出てくるのではないか。つまり、サステナビリティの根幹にかかわる時間軸(過去→未来)を意識するといいいのではないか。

また、参考3の5ページ、世界の都市の潮流というところも少し違和感がある。例示してあるニューヨーク、ロンドン、コペンハーゲン、シアトル、バルセロナ、ピッツバーグ、マンチェスター、ポートランドを見ると全て先進国のある意味綺麗なまちだが、今後の大阪のライバルになるのはエネルギーなアジアの諸都市だと思う。例えば、バンコクやクアラルンプールのような活気がある、ワクワクする、エネルギーな都市。大阪はそういうところだと思う。大阪に来るとみんなわいわいしている。食べ物もおいしいし、魅力が沢山ある。梅田駅は不慣れな私からするとごちゃごちゃしていて一見わかりにくいけど、それがかえってダンジョン的な感じでおもしろい。ある意味で混沌としてエネルギーなところが大阪の魅力なのに、SDGsの文脈で少しファッショナブルに、スマートにまとめすぎているような気がした。

(草郷先生)

「多様なチャレンジによる成長」、「いのち輝く幸せな暮らし」、「世界をともにつくる」という3つの柱の関係は対等という理解で良いか。



（事務局）

歴史や特色、ポテンシャルを踏まえながら、万博に行った子どもたちが将来、未来を考え、めざすものという意味で、「ワクワクする都市」というスローガンを整理。そこに至る取組みとして3つの方向性を整理。都市としての持続的な成長に向けた取組み、人々の暮らしも安心できるものでないといけない。それに加え、世界につながるという視点。この3つは、それぞれが独立しているのではなく、それぞれ融合しながら進めていかないと、ワクワクする都市にはたどりつかないのではないかとということ。

恐らく、先生がご疑問に思われている部分は、SDGs が3つの柱の1つとして独立しているのではないかと、ということだと思うが、誰もが主役でその可能性を十分発揮できる共創する社会をつくっていかないと3つのこともできないし、ワクワクする都市にもたどり着かないので、それぞれの取組みに誰もが活躍できる、主役になれる、だれ一人取り残さないなどの要素を入れていかなければいけないと考えている。3つの柱は並列ではなく、SDGs をどういう形で全体に融合させていくかは引き続き検討する。

（草郷先生）

今の説明を伺っていると、やはり「世界をともにつくる」という表現では意味が違うのではないかと感じる。説明していただいたように「世界とつながる」であれば理解できる。SDGs はここに書いているものを包括する概念なので、それを3つの柱の中の1つに落とし込んでしまうと座りが悪い。したがって、「世界をともにつくる」という言葉の下だけに SDGs を紐づけるのは少し危険な印象を持つ。

また、SDGs の一番の核はサステナビリティであるので、例えば、“Creative Innovation for Sustainable Development” のようにしっかりと「持続的成長」というフレーズを書き込んだ方がいいと思った。そのうえで SDGs をどのように扱うのかということだと思う。

そういう意味では、原案には、大阪らしさがなく、いい意味でのごちゃごちゃ感やワクワク感がここには入っていない。そういった点が全面的に出てきた方がいいし、図の中で SDGs は包括的なものとして上手にイラスト化できたらすごくすっきりすると思う。

（村上シニアマネージャー）

印象としては、参考4の2ページよりも参考3の8ページのキーワード方がいいのではないと思う。参考3の8ページ、万博ビジョンの方は「大阪」という主語の世界観で、SDGs はあくまで「社会」や「世界全体」がどうなっていくのか、という視点に対して何をするのか、という話だと思うので、主語を意識されるともうちょっとすっきりすると思った。

加えて、参考3の将来の課題について、人口と科学技術だけの記載は弱いと感じた。気候変動がないと将来予測の視点として不足している。地球温暖化の影響や気候変動は健康や暮らしそのものに与える影響は大きい。そこがないと足りないということが SDGs の視点でも思った。

「環境が大事」というようなイメージ的なことではなく、気候変動が現実になっていく予測を、生きていくうえでのリスクとして冷静に捉えている部分がある方がいいと思う。

(川久保先生)

これまで、いのち輝く未来社会を実現していくことが、大きく未来像、ビジョンとして受けとめていたため、資料のように「世界をともにつくる」ことだけに SDGs が関連すると、ワンオブゼムのように見える。

SDGs は 3 つの柱全てにつながっているので、村上先生から指摘があったように 8 ページの図のほうがわかりやすいと感じた。

(村上シニアマネージャー)

具体的取組みにある「プラットフォームとしての役割」という言葉がわかりにくい。先ほど来の説明を聞いて、やっぱりキーワードは“人”だということがわかった。

議題 2 の独自指標の話にも関連するが、大阪から人が出て行って人口流出しているということではなく、例えば、国連職員の大阪出身の割合とか、巣立っていつている、世界中で活躍している人を生み出しているなど、人のつながりで他にないような見せ方ができると面白いと思った。

また、こうした文脈の中で、私が問題意識を持っているのは「人権」について。結局、人の話というのは、「誰もが、一人ひとりが認められていきいき活躍できる」ということであり、それがおそらく世界では「人権」と言われていることではないか。日本では、この言葉の感覚に対する大きなギャップを感じる。人権という言葉を使ってしっかり議論していくのは日本社会の課題。世界に対して人を中心とするコンセプトを発信していこうと思うとそこは通らないといけない課題。積極的に検討いただくと、日本の中では少なくともリードしていくことができる話だと思う。

(西野所長)

国連職員もそうだが、青年海外協力隊に大阪からどれくらい人を出しているのか、あるいは協力隊に関わらず SDGs 達成に向けて国際協力に関わる取組みをしている人、企業などに関する指標を検討いただけると大変うれしい。それが府にとっての一つの国際的な活動の後押しになると思う。

(草郷先生)

未来像の記載として、例えば、誰一人取り残さない社会であれば、「誰一人取り残さない社会を大阪でつくる」、「誰もが世界に貢献する SDGs 先進都市大阪をめざす」といった形で「大阪」というものを上手に組み込んでいくことが大事だと思う。大阪という言葉を見れば、府民はそれに引っ張られ、主体性をくすぐられることになる。

大阪から生み出した人たちというのは、すごく多く、多分野に渡っている。世界で活躍する人、大阪や日本の中で社会課題に取り組んでいる人たちを取り上げていくと、いい意味で日本の社会を変えることにつながるのではないかと思う。

また、「誰一人取り残さない」＝「誰もが主役となる都市」と書いているが、そこまで断定してしまっているのかと疑問に感じた。「いきいきと暮らせる」とか、そういった言葉を検討いただいた方が良いと思う。

(川久保先生)

“SDGs Advanced Osaka”という言葉が少し気になっている。政府が”Japan Committed SDGs”といているように、例えば大阪にとってのSDGs、”Osaka Committed to SDGs”など。”Advanced”よりもわかりやすい表現になると良い。

また、大阪でこれだけ丁寧な議論を重ねてこられているので、そろそろ世界的に発信することを考えてもらいたい。来年7月に国連のHLPFがあるが、おそらく今よりVLR(Voluntary Local Review)をしていきたいと思いますという流れが強くなることが予想される。ニューヨークが初めて都市レベルでのVLRを始めた事例が資料でも記載されているが、こうした動きが今後加速すると予想されている。スモールスタートでもよいので、大阪府の取組みを英訳して発信することを検討すると良いと思った。